三島市　　（通巻第43号）

郷土館だより

Vol. 15. No.1
1992. 8. 31

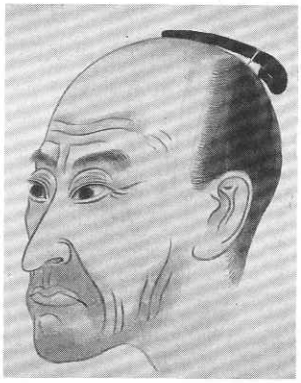
坦庵筆　山水画（下田港）

絵は、坦庵が下田港を遠望して描いたものだとされる。

のどかで、平和な風景ではあるが、幕末の下田港は数々の歴史的事件のぼっ発した、動乱の台風の目のような存在でもあった。

黒船来航、ロシア使節プチャーチン一行の寄港、安政地震の大津波によるディアナ号の難破等々、坦庵は支配地下田港の動きに、心安まる時は無かったはずである。

坦庵が得意とする水墨画の下田港に、彼の平和への願いが込められたものであろうか。



坦庵自画像

企画展・ふるさとの人物シリーズ

幕末の名代官

江川太郎左衛門（坦庵）展

平成４年７月19日(日)～９月13日(日)

郷土館のふるさとの人物シリーズの企画展「幕末の名代官　江川太郎左衛門（坦庵）展」（７月19日(日)～９月13日(日)）を開催しました。

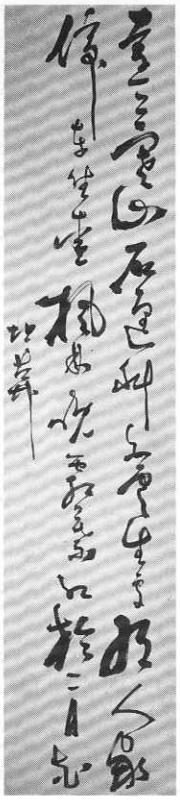
この人物シリーズにおいて、江川坦庵という人物については、シリーズ企画の当初からずっと取り上げたいと念願してきたテーマでしたが、坦庵という人物の余りにも偉大なゆえに、なかなか取り組めないままに今日まで経てしまったものです。

このたびの展示では、坦庵の発揮した多くの才能を洩らすことなく、かつ全人物像を大きくクローズアップさせたいと心掛けて、資料の収集と展示を行ったつもりです。

また、坦庵は、代官所膝元の韮山はもとより、三島やその周辺の人々に多くの書画を書き残し、大きな影響を与えております。本展示では、そのような坦庵の未知な書・画についても掘り起こし、多くの方々にごらんいただこうと企画したものでもあります。

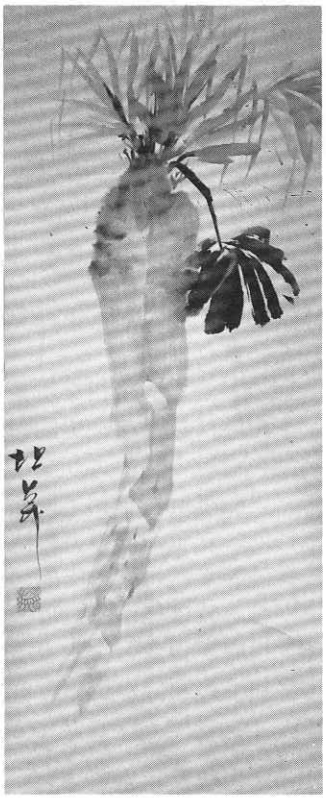
本展示が、こうした初期の目的を全て達成できたか否かは、展示をご覧になった人々の評価を待つとして、少なくとも思いがけない珍しい作品や資料を多くの方々から提供していただくことができたと思います。

ここでは、パンフレットに載せられなかった坦庵の書・画、資料等の紹介を主とし、合わせて企画展の報告をいたします。

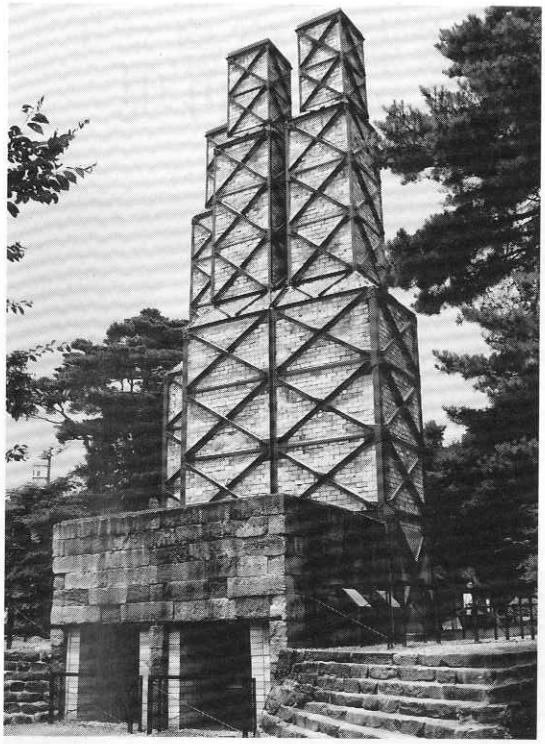


七絶詩

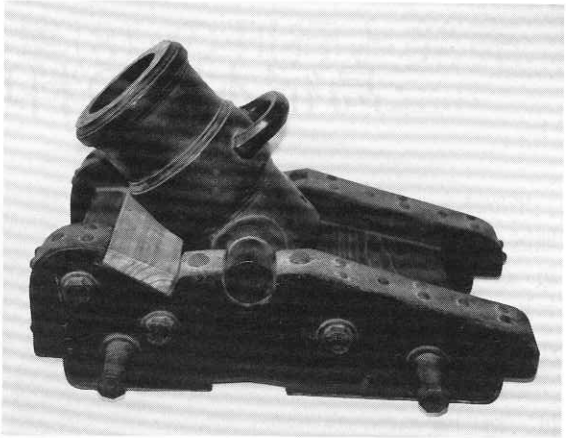
竹　図



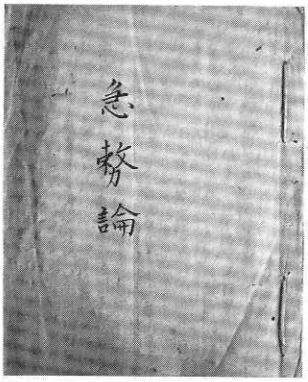
草　樹　図



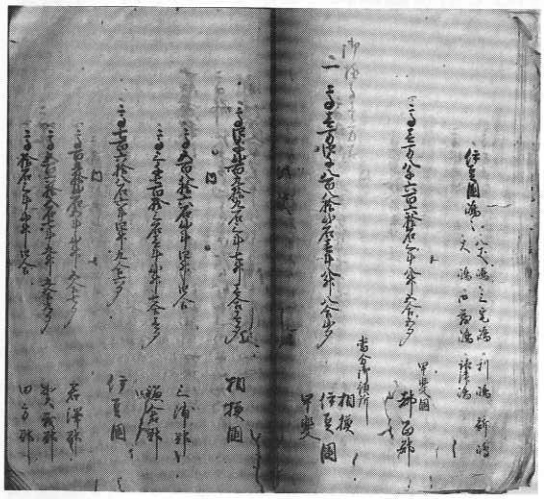
▲ 反射炉



▲ 臼　砲



▶ 急務論



▲「御用留」支配地石高

韮山代官の支配地と支配高

韮山代官所の支配地は、伊豆はもとより、駿河、相模、遠く武蔵にまで及んでいた。

その支配高は、変更や当分預地などがあるため、一定したものではなかったが、普通10万石前後の高だった。

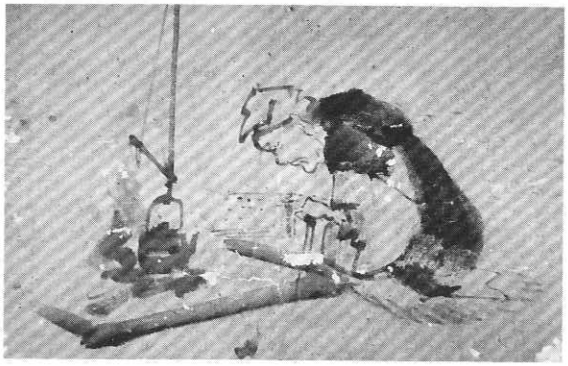
写真は、寛政４年（1792）の「御用留」である。相模や伊豆の支配高が読みとれる。

『急 務 論』

坦庵は、弘化３年（1846）に『急務論』の草稿をしたため、幕府の、その場しのぎの事なかれ主義を、強く批難した。

その内容には、農兵採用を切望する坦庵の心情が吐露されており、当時の彼の心情の一端をうかがえる。

幕府の鎖国政策は日を追って行きづまりつつある時期でもあり、坦庵の提言は勇敢な行為だったと言えよう。



▲ 習作画

三島宿本陣の料理メニューを再現

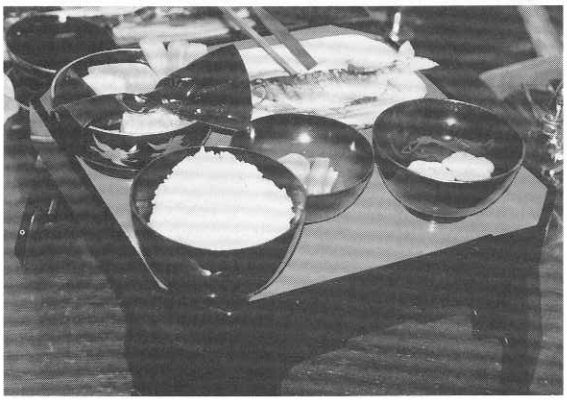
平成４年７月26日、三島市北上地区の主婦グループ（北上婦人学級･くらしのサロン）が、東海道三島宿の本陣（樋口家）にあった江戸時代の献立を再現しました。

この催しのきっかけとなったのは、樋口家から三島市郷土館に寄贈された古文書の中にあった一通の献立でした。献立文書は文化15年（1818）３月に、本陣家当主の樋口伝左衛門が幕府役人に出したものの控えです。それによれば、献立は朝食と夕食の二通りとなっていて、朝食は「石焼き豆腐」「お新香」「汁」「飯」の一汁一菜、夕食は「魚の煮付け」「ワラビ・氷こんにゃく・芋・こんぶの煮付」「汁」「飯」の一汁二菜となっていました。

▲ 本陣料理を前に樋口氏（右）と庄司さん

この古文書の解読を『郷土館だより』（通巻第19号）に載せ、その記事を紹介したところ、これに大変興味を持たれ、実際に作ってみたいと言われたのがくらしのサロンの庄司峰子部長でした。

庄司さんの苦心は季節の材料（旬）の調達、調味料と調理方法、出来上がった料理の配膳方法等、並々ならないものがありました。文書中には献立は記されているものの、調理方法など細部にわたっては記述がないので種々の問題点には「むかしを偲んで」対処するしか方法が無かったからです。



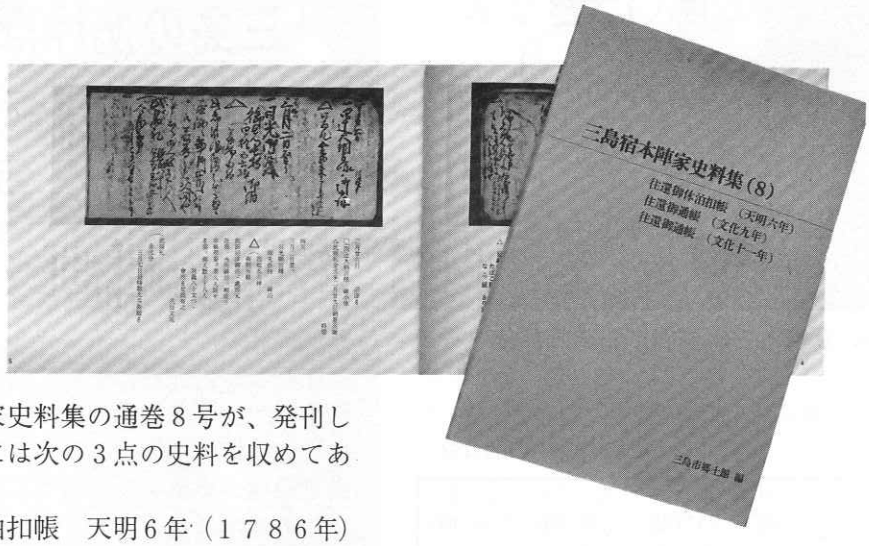
▲ 再現された本陣料理

特に「石焼き豆腐」と「氷こんにゃく」には、頭を悩まされたようです。いずれも現在の三島には伝えられていない調理方法で、その材料は簡単に手に入っても、どのように調理したものかと、あっちこっちで伝承を求めて調べて回ったそうです。苦心の結果、石焼き豆腐はフライパンを使って作ることができ、氷こんにゃくは、昔この地方でもあったという「凍(し)みこん」作りの方法で、なんとか再現できたものです。

催しの日、徳倉の旧家、遠藤家から借りた塗りものの食器と足付膳に盛り付けし、現在の樋口家当主、樋口正智氏を招待し、賑やかに本陣料理再現の会が開かれました。

一通の本陣文書から、上記のような郷土の歴史的な「くらし」を再現、追体験することが出来ました。「おいしかった」「あっさりして、健康的な味がした」など、さまざまな感想が聞かれ、今後も、このような歴史・民俗の掘り起こしを続けたいとの意見も出たりで、会は大成功に終わることができた次第です。

「三島宿本陣家史料集(8)」の刊行と発売



三島宿本陣家史料集の通巻８号が、発刊しました。それには次の３点の史料を収めてあります。

(1)往還御休泊扣帳　天明６年（１７８６年）
(2)往還御通帳　文化９年（１８１２年）
(3)往還御通帳　文化11年（１８１４年）

この３点の史料のうち、(1)と(2)(3)は表題が異なっているものの内容は同じで、文字通り東海道を往来し、本陣という特別な宿泊施設を利用した者たちを本陣が、記録したものです。いわば、年度ごとの本陣宿泊記録帳です。したがって、各史料の構成は単純で、正月から始まって極月（12月）までの宿泊記録を日付順に記入しただけのものです。しかし、そうした日々くり返された単調な本陣業務の書きつけの中に、後世の者は極めて興味深い江戸時代の暮らしの一部を発見できます。その一つは幕府や諸藩の役人、公家、僧侶たちの旅のようすであり、一方ではかれらを待ち受け、接待を施した本陣のようすです。このような東海道をはじめとした全国の諸街道の交通事情は、残されている「旅日記」や諸々の書物でかなり明らかにされてはいますが、まだ細部にわたっては判らない部分も多く、特に一地方の年間を通しての記録となると、その史料の公開例はわずかしかないのが現状です。そうした意味においては、本史料は数少ない江戸時代の生き生きとした生活を伝える貴重なものと言えます。

現在、郷土館受付にて販売しています。
（価格2,200円，送料260円）

遠方の方で購入ご希望の場合は、書籍代に送料を添えて現金書留または郵便局の定額小為替を利用して、お申し込み下さい。

■ 資料収集状況 ■

採集日	提供者	住　所	資　料　名	数量
H.4.4.10	小島弘一氏	市内多呂296	・真艸早引大全 ・静岡県田方郡中郷村村勢一班 ・傍訓改正日本民法(完) ・学習研究社発行物附録 ・公用書式見本帳	5点
H.4.4.12	武藤　久氏	沼津市黄瀬川431－1	・木銃	1点
H.4.5.19	青木義雄氏	市内若松町4385－14	・第２飛行集(師)団司令部の思い出 ・米軍使用のスコップ	2点
H.4.6.12	後藤清一氏	市内東町	・「金山神」掛軸（２点） ・俳句四題掛軸 ・「天照皇大神宮」掛軸	4点
H.4.6.29	池谷良仁氏	市内本町	・「狩野川改修事務所」看板	1点

▲ 夏梅木古墳群出土の装飾品他

「三島のあけぼのⅢ」入館者数

（平成４年３月22日～５月31日）

区分	３　月（10日間）	４　月（29日間）	５　月（31日間）	合　計（70日間）
学　生（小中高）	1,070	2,056	2,635	5,761
一　般（個人）	1,650	4,634	5,850	12,134
団　体（30人以上）	(2) 330	(6) 345	(18) 1,527	(26) 2,202
合　計	3,050	7,035	10,012	20,097

企画展

「三島のあけぼのⅢ」

三島の自然環境と古代遺跡

報　　告

三島市内で、ここ数年間に発掘調査を行った埋蔵文化財を、箱根西麓・三島市街地・平野部の３つの地区に分け紹介したものです。

旧石器時代の石器から、縄文時代の料理跡、弥生時代の水田遺構、奈良時代の役人の石帯、中世の漆器・下駄、江戸時代の陶磁器・古銭、大正時代のガラスビンまで、数千年にわたってこの地域に生きた人々の生活の証の数々が展示されました。（詳細は42号参照）

又、今回市の文化財に指定された考古資料として向山古墳群出土鉄製品（鉄剣・鉄鉾・直刀・鉄鏃）、観音洞遺跡出土吊手土器、光安寺板碑（南北朝期）も同時に展示され、来館者の注目を浴びていました。

（３月22日～５月31日）

郷土館講座　「三島のあけぼの」

企画展「三島のあけぼのⅢ」に関連して、三島の古代についての講演と、展示解説を行いました。（５月20日）

講師に市文化財保護審議委員　斉藤宏先生、解説は市社会教育課発掘調査担当の鈴木学芸員にお願いしました。

斉藤先生は三島の古代遺跡について、旧石器時代から古墳時代まで、各時代ごと生活の変化を中心に、地図や年表・図を用いてわかり易く解説されました。（写真）

企画展示場では、各遺跡の出土状況や遺物の解説を受けました。

ユーモアあふれる斉藤先生のお話や見る機会の少ない発掘資料を目前にして、33人の受講生たちは、いっそうの興味をそそられたようでした。

▲ 夏梅木古墳の発掘された石棺を見る

▲ 猪土手の話を聞く子供達

夏の郷土学習

「ふるさとの歴史を訪ねて」

箱根西麓の集落から、箱根を越える東海道へ出る道として、韮山道と呼ばれる古道があります。戦国時代、韮山城と小田原城後北条氏との連絡のために整備されたといわれ、江戸時代は、韮山代官をはじめ頻繁に利用された道でした。

郷土館運営委員の鈴木辰己先生に案内していただき、市内の小学４年～６年生21人が、韮山道の一部（向山小から玉沢まで）伸べ約８kmを歩きました。（８月５日）

途中数々の史跡に巡り合いました。猪の被害を防ぐため江戸時代に築かれた３kmに及ぶ猪土手や猪の落とし穴が山林に埋もれていました。県東部有数の古墳群である向山古墳群・夏梅木古墳群が近辺にあり、一部発掘調査された古墳の石棺も見ることができました。

各集落への分岐には、ひっそりと馬頭観音が祀られ、いくつかの道しるべが残されていました。

鈴木先生が語る昔話を聞きながら、小学生は昔の人々の生活に思いをはせたようでした。

縄文土器作り教室

恒例の縄文土器作り教室が、今年も小学４年生～６年生、29人を対象に実施しました。

日程　７月24日　土ねり（粘土を作る）
　　７月28日　成　形（土器の形を作る）
　　８月26日　焼　成（土器を焼く）

▲ 出来上がった土器を前に満足気な顔。そして疲れた顔。

◀ 土器を入れた炉にマキをくべる。熱い。

連日の猛暑の中、汗まみれで作った土器が、火の中から出て来た時はどの子も、歓声を上げていました。

郷土館　行事予定

■ 企画展「古瓦」展

（10月下旬～５年１月上旬）

伊豆国分寺、三島古寺院を中心に駿・甲・相・武の古寺院の瓦及び中国や朝鮮の瓦を展示。

（静岡市，駿府博物館所蔵の古瓦を中心に）

■ 企画展「祝いごとの民俗」

（平成５年３月中旬～同５月中旬）

三島・伊豆半島を中心に収集調査した「祝いごと」の民俗展示

（人の一生の祝いごと、農耕と祝いごと、ムラや家の祝いごと）

企画展「祝いごとの民俗」の開催にあたりお願い

私たちのくらしと、その周辺には数々の祝いごとがあります。

ひとの一生では、誕生から死に至るまで、大切な節目節目に成長を祝っての催しを行います。人生の通過儀礼といいます。祝いごとは人生の記録ともいえるでしょう。

家族、村や町など、ひとの集団においても、種々の祝いごとがあります。家を新築したり、寺院や神社のお祭りを催すことは、ひとびとが共同でくらして行く上での祝いごとです。

郷土館では、来年３月からの企画展で、このようなさまざまな「祝いごと」を取り上げて展示します。

みな様のお手元に、昔の懐かしい祝いごとの資料や写真が有りましたら、郷土館までご一報下さい。

（例、婚礼写真、誕生祝い、百一衣、初宮参り、七五三、成人式、還暦、古希、米寿、葬儀、建前式など。）

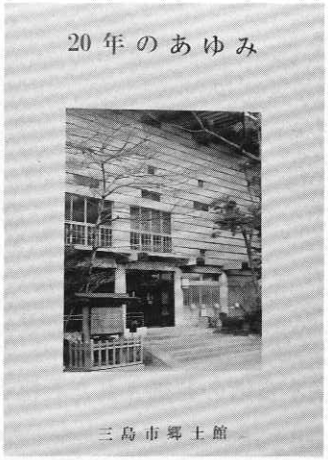
郷土館　人事移動のお知らせ

新任館長　山　田　美津子

（市下水道管理課より）

前館長　佐　藤　　劭

（市出納室へ転出）（４月１日付）



「20年のあゆみ」刊行のお知らせ

三島市郷土館は開館以来20年を迎え、これを記念して「20年のあゆみ」としてまとめました。

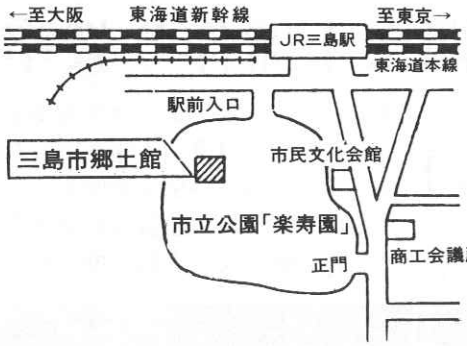
郷土館建設経過・郷土館概要・開館以来の事業内容他の構成となっています。（52ページ）今後の郷土館のあり方を考える指針となれば幸いです。

利用案内

休館日　毎月第２月曜・12月27日～１月２日

開館時間　午前９時～午後４時30分

入場無料（但し、楽寿園入場の際、有料）



三島駅（南口）から徒歩５分。市立公園楽寿園内

郷土館だより　No.43
平成４年８月31日発行
（年３回発行）
編　集　三島市郷土館
住　所　〒411 三島市一番町19-3 楽寿園内
TEL　0559－71－8228
FAX　0559－81－3730
発　行　三島市教育委員会